

教 仁 名 聞

第 171 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 12 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

和と妥協 佐々木蓮磨

滋賀県の北部に、念仏者の老夫婦が住んでおりました。どちらもよく聞法して、念仏を喜んでいたので、世間の評判を聞くと、老夫の方がいつそう信に徹底しているということでありました。

ある日のこと、老夫が老婦から灸をすえてもらっているところへ一人の客が訪ねてきて「今日日は悪いから、灸はすえてはいかん、早く止めなさい」と。すると老婦は、客のこ

とばが終わるや否や、「わが浄土真宗では、日のよしあしや、方角のよしあしはいわぬのだからかまわぬ」と反論したのであります。

ところが老夫の方は、ニコニコ笑いながら「まあ日が悪ければ止めておこうじやないか」といって、灸をすえるのを止めさせたのであります。

客はしばらく話をしてか

ら、その家を去りました。すると、老夫は老婦に向かつて「さあ灸の道具を出して、もう一度すえてくれ」と申しますので、老婦は「今あなたは日が悪いというので、灸をすえるのを止めたではありませんか」と反問すると、老父の言うには「日の悪い人はおらぬから、よいではないか」と。まことに面白い話だと思えます。

いまの老父にしてみれば、浄土真宗では日のよしあしを言わぬということには十分知っているのであります。今の客の親切に対して、反論するということは失礼でもあり、また、反論すれば争いに合わねばならぬから、それを避けて、ともかくその場は客の親切を受け、また和を破らぬために、真宗の道にはずれたことをも敢えてしたわけでありませう。

聖徳太子は「和を以て貴

げて情を折ることこそ仏の御慈悲なれ」と示して、無我への道を明らかに教えて下されたのであります。

となす」と仰せられて、人生活の目標が和にあることを明確に示されたのであります。蓮如上人は「仏法は無我にて候」と教えられました。無我と和は物の表裏のようなもので、無我になれば、おのずから和を成じ、和を実現するには、なんとしても無我にならねばなりません。また無我になるために、どうしても理屈と感情を捨てねばなりません。そこで蓮如上人は「理をま

今の老婦が「真宗では、日のよしあしは言わぬ」と言ったのは、一つの理屈であり、「それだからかまわぬ」と言い張ったのは、感情であります。老夫が「日が悪ければ、止めておこう」と言ったのは、理をまげて情を折った姿であります。老婦の態度で行けば、争いの世界を拵(こしら)えるのみで、何の益もないことです。老夫の態度で行けば、争いを避けて和の世界を成就します。いかに正しいことでも、それを言い張ると我が働きますから、正しいままが、

《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (日) 午後二時始

講師 山口県防府市

宮田 秀成 先生

*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。どなたでも自由にお参りください。

対話編 『浄土真宗』

17

正しくないものになるのでありますまいか。蓮如上人が「たとい正義たりとも、しげからんは停止すべし」とおいましめ下されたおこころを、深く味わうべきであります。

かつて、私がある婦人研修会に参りました。「和」の話をしましたところ、その後で行われた座談会るとき、一人の婦人が発言しまして「和と言えば善く聞こえますが、妥協と言えば悪く聞こえます。和と妥協とは、どう違うのですか」と質問しました。

そこで私は「妥協というのは、何らの信念なき、徒らに相手に合わせて行くことで、全く自己を喪失しているものであるが、和は高き理想の下に、信念をもって他と和して行く道であるから、自己喪失どころか、むしろ自己をより大きく高めて行くものである。従って、形は似ているが、精神的には正反対の行き方である」と答えました。(了)

A 「第十八願の成就文のお話を続けます。成就文の全体を引用しますと、

あらゆる衆生、その名号を聞き、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心廻向し たまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と正法を誹謗するものをば除く。

です。先ず、(唯五逆と正法を誹謗するものをば除く)は五逆(親を殺し聖者を害するなど)という重罪をつくり、正法(仏法)を否定する者は救いから除かれる、という言葉ですが、この(唯除の文)を表面的に読むと、お念仏を信じる者であつても親を殺すような重罪を作つたり正法(仏法)を誹るような者は救いから除外すると読めます。ところが親鸞聖人は本願のお心に沿つ

て深掘りをして読んでおられます」

B 「聖人は唯除の文をどのように領解されたのですか」

A 「このことは二〇二四年七月号に述べましたので、ここでは省きますが、第十八願成就文にも唯除の文があることは、どういう意味があるかを考えてみます」

B 「本願成就文は、本願の名号を聞く信の一念に往生が定まることを説かれた文でしたね。しかるに浄土への往生が定まった人にも拘わらず、なお(唯除の文)が後ろに付いているのはなぜなのかという問題ですね」

A 「そうです。これを実際の信仰生活の上で考えて見たいと思います。これは信心をいただいた者であつても、アミダ仏の救いに甘えて五逆罪はもとより十悪(殺し、盗み、不倫、ウソなど)をなすようなことをせず、また仏陀の教えを否定する

ような邪見を持たないようにとお勧めなさるのです。

そういう悪をすることは諸仏方は嫌つておられ、悲しんでおられるの思し召しです。実際、本願のお助けをいただいたなら、いよいよ善に励むように生きるのが望まれているのです」

B 「この煩惱の身をもつて生きる上で、親鸞聖人も(さるべき業縁のもようさばいかなるふるまいもすべし)と仰せられているように、煩惱に動かされやすい身ですから、どんなあさましいことをもしかねないのですね。自分の心(煩惱)に振り回されないように用心しなければなりませんね」

A 「ええそうです。昔の高僧が毎朝起きると(我が心にだまされるなよ)と自分に言いかけさせていたという話を聞いたことがあります。そういう点で、唯除の文は、仏様が本願のお助けがある

からといって、(悪はかまわん、悪を行つても救われる)と自分の悪を肯定するのを誠め、悪を諸仏は嫌いたもうゆえ、悪を慎み善を励めとのお勧めであるということとです。それと大事なのは、この唯除の文が教えてくださる眼目は、自分の自性を知らせてくださるお言葉だということとです」

B 「自性とは」

A 「本質的な性質のこととです」

B 「ここではどういう性質ですか」

A 「それは、アミダ仏の救いを拒絶し自らを救いから除外している、罪悪深重の助からぬ身であるぞ、それが汝の自性であるぞ、との仏語です」

B 「これは信前の者への仰せですか」

A 「いいえ、信前でも信後でも、(汝の自性は五逆や正法を誹謗する者であるぞ)との仏の仰せです」

B 「自性は具体的にどう仰せられるのでしょうか」

A 「自分を産んで育ててくれた親を憎みそしり、殺し

かねない者であり、真理を説いてくださる聖者や善知識を憎み、そしり、殺しかねない者であり、いつまでも真理（仏法）を受け入れず、反発し、信じない者、それが汝の自性なのだと言われるのです。厳しい言葉です」

B 「こういう本性を持つているといわれるのですね」

A 「ええ、こういう悪に染まり、仏法に反逆してきた者よと仰せられるのです。これは私の自己反省で分かることではありません。私の心の底の底を見たもう仏の眼によって知られた私の姿です。そういう私だから、いままで仏に成らず、生まれ変わり死に変わりして流れ転がってきて今も人間界にいるのです」

B 「現在の私にはとてもそういう自分だとは思えませんが」

A 「私もおなじです。けれども今人として此処に居るのは生まれ変わり死に変わりして、いまだ仏にならずに迷いの人間をしているということです。煩惱悪業を

重ね、仏法を信じないできたのであり、仏の教に遇ってもそれをはねつけ続けてきたので、今もまだ人間しているのでしょうか」

B 「自分の反省ぐらいで知れる私の本性ではありませんね」

A 「ええ、仏の覚りの眼から見られた凡夫の真相なのですね。善導師の言葉に

自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没しつねに流転して、出離の縁あることなし。

とあります。私の自性を知られたもう仏の言葉によって私たちは自分の本性を知らしめていただけなのです。そういう親殺し、聖者殺しなどを逆罪といえます。これは罪が深いので地獄に堕ちる罪と説かれています。それと誹謗正法の罪です」

B 「誹謗正法とは」

A 「仏法を否定する罪です。広くいえば真理を否定し、そしる罪であり、身近にいうとアマダ仏の本願を否定し、疑い、信じないことであり、信じることの出来ない罪です。これが一番重い罪です。五逆罪の根は誹謗正法つまり真理を認めず、真理に背き、自我の欲望を中心にし、自我の欲求を中心から十悪や五逆の悪が起こって来るのです」

B 「自我中心で生きるところから様々な悪が起こって来るのであり、その悪の最も重いのが五逆であり、その元は正法を否定することなのです」

A 「ええそうです。自我中心の生き方とは、自分の（あなりたい、こうなりたい）という我欲、自分の私的な願望を実現する事を第一とし、自分の描いた人生のプログラムを実現しようとしていく、いわば自我中心の生き方です。そこから経済的な貪欲、名利の心、勝れている者への嫉妬、自分の利益を損なう者への怒りや憎しみ、そしてついには親までも害しかねない心です」

B 「そういう自我中心の生き方を長年続けてきたのですね」

A 「そうです。なぜ自我中心になるのか。それは自我

しか知らず本当の自己を知らないという無知（無明）が基になっているからです。真実の自己を教えてください、正しい仏法を聞こうともせず、それを（必要ない）と否定し、信ぜず、疑い捨ててきたからです」

B 「では無明ゆえに自我中心的に生きてきた私が、どこで救われるのですか」

A 「自我中心の罪深い存在であると知らされるとともに、その私をアマダ仏は撰め取ってくださいと知らされる、これが救いです」

B 「救われると自我中心性がなくなるのですか」

A 「なくならないのです。この身が亡くなる、いわば死ぬまで続くといわれています」

B 「自我中心性がなくならないけれども救いがあるのですね」

A 「自我中心の罪があるままで、アマダ仏の大悲のいのちに掴まれているのです」

B 「そのこととこの第十八願成就文とはどういう関係にあるのですか」

深い人間であっても、私の存在はアマダ仏と離れない、アマダ仏のお手の中に在ると知らされた信心を因として浄土に往生する事が定まった身にさせていただく。それが（即ち往生を得て不退転に住せん）のお心でした。その次の（唯五逆と正法を誹謗するものをば除く）は、いかにアマダ仏にであっても私の自性は自我中心性であって五逆を起こしかねないものであり、仏法に反逆し、仏法を受けつけない存在、いわば救いを自らから排除している人間であることを知らされる。自分を見ると救われ難き身と知らされるのです」

B 「救われ難き身と救いたもう南無阿弥陀仏とはどういう関係があるのですか」

A 「それはいつ見ても自分は救われ難き身である、その救われ難き身をこそ救わずにはおかない、（助けさせてくれよ）の大悲がましまして、その仰せが南無阿弥陀仏なのです。ですから、救われて当然な私ではなく、救われる資格のないこんな

私を引き受けたもうのです。

ああ有り難いと感じざるを得ないのです」

B 「こういう信心の生活は、この助からぬ私を助けたもうアミダ仏ましますという信心で一生過ごす生活なのですね」

A 「ええそうです。アミダ仏の大悲にふれるといよいよ煩惱熾盛の私であることを知らされるのです」

B 「煩惱の深い身なのですね」

A 「煩惱の底はどれほど深いか私には分かりません。しかし、五逆の罪をおかしかねず、仏法を否定し、あるいは疑う心が起る、そのような救われ難き身と知らされる。と同時にいよいよこんな者を（助ける）とのお大悲をお聞かせいただくばかりです。有り難いです。どっちへどうころんでもアミダ仏の大悲のいのちの中であり、そこから一瞬も離れることはできません。仏に反逆するような心が起ころうともアミダ仏に掴まれてしまった者は、阿弥陀仏の大悲のいのちのお手の中

から離れられないのです」

B 「有り難いですね」

A 「信前であろうと信後であろうと、本当はどんな人もアミダ仏を離れて存在し得ないのです。そのことが信心の智慧によって知らされるのです」

B 「そういう五逆・誹謗正法の本性の姿を知らされ、その私を離れないアミダ仏を知らされるのですね。それで十八願成就文に唯除の文がついているのですね」

A 「ええ、そうです。どれほど疑いの心が起ころうとも、仏に背く心が起ころうとも、疑うような者がお目当ての救いと聞かされます。疑い心が起ることが助けられる証拠だとさえいえるのです。どんな心が起ころうとも、アミダ仏の撰取不捨の事実は変わりません」

B 「しかし、それはいわゆる（疑心往生）という異安心ではありませんか」

A 「外からは（疑心往生）の異安心と受け取られやすいのですが、もし、疑い心を離れ信心を起こして初めて助かるのなら、信じたら

救われるし、疑ったら救われないということになりま

すね。私たちの信不信・信心の心によって往生が出来るか出来ないかが決まるということになりましょう」

B 「ええそう思いますが」

A 「これについては教義的な解釈でどうこういうのではなく、実際の経験のうえで話しますと、もしそういう教えでしたら、私は救われなかつたでしょう。教えをどれだけ聞いても疑いが晴れず、信じることが出来ず、救いがない状態に止まっていますから。しかし

はからずも、（そんな疑いだらけで助からぬ者だから、そのままなりで弥陀が引き受ける）という広大な大悲のお心が届いて、疑いだらけのままお助けにあいました」

B 「しかし、そういうのは（なでつけ安心）といって、助からぬ者を助けてくださると、自分に言い聞かせて、いわば教えの言葉を自分の心になでつけて落ち着こうとする異安心ではありませんか」

A 「私の自我心は教えをな

でつけるしかなく、いつまでたっても異安心でしかなく、いつまでたっても疑いだらけしかないのでしよう。ところが有り難いことに、南無阿弥陀仏の大悲を聞かせていただく、私が信じようが疑おうが、なでつけようがなでつけまいが、ど

つちも全くだめで、そんな私にアミダの大悲のお心を聞くと、もはや自分の信心や疑い心もまったく用がなくなってしまう。（汝の心の善し悪しでは助からぬ、汝の心の信不信では助からぬ、丸々汝は助からぬ奴ゆえ、ソノママナリデ全面的に引き受ける。お前は口先で念

仏するだけでよい、何もいらない）との仏心大悲の仰せにあきれてナムアミダブツナムアミダブツとお念仏するだけで、こちらからの用意はチリばかりもいりませんでした、ナムアミダブツ。私の救いなきところできました」

B 「そのところをもっと聞きたいです」 （了）

【住職雑感】

先日、Google で「妙好人」と検索すると、才市・庄松・源左・清九郎さんなど有名な妙好人の名前があがってくる中に前川五郎松さんの名があつたので、おやおやと思ひ又懐かしく思つた。生前の前川さんとは十九歳の時、初めて石川県の浄秀寺の夏期講習会でお会いした。この夏期講習会は毎年夏に五日間あり、聞法にどっぷり浸かる期間であつた。北海道から九州まで全国から大勢の熱心な聞法者が集まり聴聞し座談し、頗る濃度の濃い聞法会であつた。藤原鉄乗、藤原正遠を中心に、池田勇諦・吉田龍象という名師方の説法が毎日あり、しかも法話の間に、各師を囲んでの真剣な座談会があつて、夜は聞法者たちの感話があつた。世間話をする人は一人もいない。まさに仏法づけの集まりであつた。その中の一人が前川五郎松さんで時々感話され、何かしら尊く有り難い感じのご老人で印象的なお方だつた。夫婦ともに熱心で一番前で聞法しておられたのである。その時に「一息が阿弥陀様」というような話をされたのを覚えていたが、その当時の私にはそのお心は分からなかつたが、今となってやっと同感できる次第である。